

※レポートに取り組むにあたって大切なこと(必ず実践してください。)

①教科書本文をつっかえることがなくなるまで音読する。(学習書の現代仮名遣いの読み方を参考にしてください)  
 ・自分の声で読んで、耳からも「音の記憶」として脳みそに入れておく。↓自分の声で読んでおくとテストで「この漢字のふりがなを書きなさい」という問題が出ても対応できる。目で読むだけでは、読んだ気になってしまっ、結局は読めない。

**例題1** 頭中将(P24L12)の読みを現代仮名遣いで書きなさい。(答え とうのちゅうじょう 学習書上P29L16)

**例題2** わづらはしき身(P24L3)の読みを現代仮名遣いで書きなさい。(答え わずらわしきみ 学習書下P29L3)

②画数の多い漢字や、古典特有の言葉や誤字なく書けるようになるまで練習する。(別冊ノートを持つことを薦めます)  
 ・これも目で読むだけでは、覚えた気になってしまう。鉛筆を持って自分で何度も書くことよって、手の筋肉にも動きを覚えさせるつもりで取り組もう。

**例題1** もちづき(P22L2)を漢字で書きなさい。(答え 望月)

**例題2** たてまつれ(P23L7)を漢字で書きなさい。(答え 奉れ 学習書下P28L4)

③全ての作品について、(1)ジャンル(2)成立した時代(3)作品名(4)作者名はレポートの出題になくても、当然、確認し、理解してから読むこと。だれが、いつ書いた、何というタイトルの、どんな作品かを知らずにレポートに取り組んではいけません。

**例題1** 報告課題①一、より

(3)『竹取物語』は(1)伝奇物語の最初の作品で、『源氏物語』の中で「物語の出で来はじめの祖(おや)」と  
 言われている。作者は(4)未詳。伝承された説話をもとにして、(2)十世紀中ごろまでに成立。現存する最古の  
 (★)である。竹取の翁の紹介とかぐや姫の出生、五人の貴公子の求婚、(★)の求婚、かぐや姫の昇天、という内  
 容が、素朴で簡潔な文体で語られている。

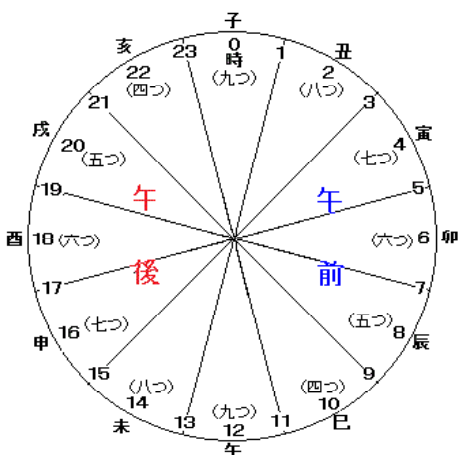
・この問題で、君たちが書けば良いのは、二か所の空欄(★)だけです。しかし、大切なのは(1)～(4)までの、この作品に関する**基本情報**です。この四つの情報を知らずにレポートに取り組んではいけません。テストでも必ず問います。正確な漢字で書けるようになっておこう。

・報告課題①の裏面『伊勢物語』についても、一、の問題には空欄が三か所ありますが、四つの基本情報はしっかり押さえて漢字で書けるようになっておこう。

※以上①～③のことが確認、理解できてから初めて「④」としてレポートの問題を解きましょう!

「竹取物語」かぐや姫の昇天

P22L1 子の時



L2 望月(満月・十五夜。他に1日||新月、7日||半月など)

L7 念じて||我慢して

L8 痴れに痴れて||動詞を重ねて強調する。ただただ、もう頭がぼんやりして

P23L7 聞こしめし||めしあがる。「食ふ」の尊敬語

L12 文||手紙。他に書物、漢学、漢詩という意味もある。

L13 なのたまひそ||な+動詞+そ↓禁止(ここでは「おっしゃるな」)

L14 おほやけ||漢字で書くこと「公」。貴族を公家と書くのはここからきて

P23L11

**問**

「衣着せつる人は、★心異になるなりといふ。」とあるが、これは現代語訳すると「この着物を着せられた人は、心が(人間とは)違ってしまふということだ」という意味である。  
 では、この場面のあと、この衣を着せられたかぐや姫がどのような精神状態になったか、その部分を抜き出さない。

**ヒント**

次ページ後半、「天の羽衣うち着せ奉りつれば」「この衣着つる人」といった「着ること」に関わる表現があるので、そのあたりを探すこと。

P24L15 具して||一緒に連れ立って

5人の貴公子とかぐや姫の求めた難題

- いしつくりのみこ(石作皇子) ∴求婚者1 (仏の御石の鉢)  
 くらもちのみこ(庫持皇子) ∴求婚者2 (蓬萊の玉の枝)  
 右大臣 あべのみむらじ(阿倍) ∴求婚者3 (火鼠の皮衣)  
 大納言 おほとものみゆき(大伴) ∴求婚者4 (龍の首の玉)  
 中納言 いそのかみのまるたり(石上) ∴求婚者5 (燕の子安貝)

※テストの出題形式・傾向について※

担当者(中山)は古典分野のテストで、教科書本文がきちんと読めているかを問いたい場合、以下のような出題をします。(レポートを覚えているか、レポートをきちんと復習したか、を問うのではないことに注意)

- ① 歴史的仮名遣いで書きなさい。
- ② 現代仮名遣いで書きなさい。
- ③ 現代の発音を書きなさい。
- ④ 現代語訳しなさい。

以上、4点の例題を教科書本文で作成してみる。

P 22 L 5 ①ものに襲はるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。(教科書本文はもちろん、①歴史的仮名遣いです。)

②ものに襲<sup>ウ</sup>るる<sup>ヨ</sup>うにて、あ<sup>イ</sup>戦<sup>ワ</sup>ん心もなかりけり。(国語総合の教科書P 252を復習すること。また、学習書P 27下段、フリガナ参照)

③ものに襲<sup>ウ</sup>るる<sup>ヨ</sup>にて、あ<sup>イ</sup>戦<sup>ワ</sup>ん心もなかりけり。(国語総合の教科書P 252を復習すること。また、学習書P 27下段、フリガナ参照)

④物の怪に襲われたようになって、闘い合おうとする気持ちもなくなったそうである。(学習書P 27上段参照)

・過去の国語総合のテストでも、レポートでも②現代仮名遣いで書きなさいという出題の時に、④現代語訳を書いたり、その反対に④現代語訳しなさいという出題の時に、②現代仮名遣いで書いてきたりという混乱をする人がいたので、注意をしてください。

「伊勢物語」初冠

P 26 L 1 初冠Ⅱ現在の成人式。元服という。女子の成人式は「裳着」という。

L 2 はらからⅡ同じ母から生まれた「きょうだい」のこと。

L 3 問 「ふるさと」の意味は何か。自分の生まれた故郷という意味ではない。昔の都のこと。ここでは「奈良の都」のこと。

L 6 問 「若紫」とは何の比喩か。原文から抜き出せ、という問いにも、訳して示せという問いにも対応できるようにしておくこと。

報告課題①裏面一、L 3 「六歌仙」とは左の絵の有名歌人6人のこと。

(後列左から文屋康秀、小野小町、僧正遍昭、前列左から喜撰法師、在原業平、大伴黒主)



『古今和歌集』真名序(漢文による序文)、仮名序(ひらがな混じりの和文による序文)にそれぞれの歌人の評価をしている。なお「六歌仙」は後の時代の人が名付けたものです。

ちかき世に、その名きこえたる人は、すなはち僧正遍昭は、歌のさまはえたれども、まことすくなし。たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心をうごかすがごとし。

ありはらのなりひらは、その心あまりて、ことばたらず。しぼめる花のいろなくて、にほひのこれるがごとし。

ふんやのやすひでは、ことばはたくみにて、そのさま身に負はず。いはば、商人のよききぬ着たらんがごとし。

宇治山の僧喜撰は、ことばかすかにして、始め終り、たしかならず。いはば、秋の月をみるに、あかつきの雲にあへるがごとし。よめるうた、おほくきこえねば、かれこれをかよはして、よくしらず。

をののこまちは、いにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女の、なやめるところあるにいたり。つよからぬは、女の歌なればなるべし。

大伴のくろぬしは、そのさまいやし。いはば、たきぎおへる山人の、花のかげにやすめるがごとし。

「徒然草」公世の二位のせうとに

この報告課題もまず、一、の問題文中から(1)ジャンル、(2)成立した時代、(3)作品名、(4)作者名を先に覚えてしまおう。レポートには(2)成立した時代が書いてはいないが、それは教科書P41や年表P280を確認すれば分かることです。年代まで覚えきれなければおおよっぱに鎌倉時代の終わり、と覚えておけばよろしい。

※誤字に注意！ 徒然草 従や縦などと間違えないこと。

P 34 L 3

問

「れ」の意味は何か。…この「れ」は基本形は「る」で、現代語では「れる」にあたる助動詞です。(教科書P284・文語助動詞活用表)この助動詞には「受身・尊敬・自発・可能」の四つの意味がありますが、ここ

での意味は、学習書P40L8「その木をお切りになってしまった」とあるように、木を切るといふ動作をした僧正を「尊敬」していると考えます。

例題1 助動詞「る」について、次の傍線部の意味は何か、現代語訳を参考に、下のカッコに書きなさい。

・人にいと**はれず**、よろず許されけり。(現代語訳：人に嫌**われず**、全て許されていた。)

・興なき事を言ひてもよく笑ふにぞ、品のほどは**かられぬ**べき。(現代語訳：面白くないことを言ってもよく笑う人は、人格や上品さが**自然と**、推量**される**に違いない。)

・知らぬ人の中にうち臥ふして、つゆまどろ**まれず**。(現代語訳：知らない人ばかりの中で、臥せていても少しも眠ることが**できない**。)

報告課題①裏面五、序文は**暗記**すること。(テストは空欄補充にする予定です。)

※兼好法師がこの作品を書いた動機や状況がこの序文に集約されています。

(動機)つれづれなるままに：暇でやることなく、手持ちぶさただったから

(いつ書いたか)日暮らし：一日中

(どんな状態で)硯にむかひて：硯に向かつて(紙と筆を持って)

(どんな内容を)心にうつりゆくよしなしごとを：心に浮かんで消えていくしょうもないことを

(目的)そこはかとなく：とりとめもなく

(完成したものを自分で読んだ感想)あやしうこそものぐるほしけれ：不思議なほど妙な気分になるものだ